

16.地域社会のこれから:子ども食堂での経験と感じた課題から考える

國井理央

1.子ども食堂に対する認識

現代社会で課題とされている孤独や孤立の問題について、解決に向けて子どもたちを対象として行っている活動の一つとして子ども食堂がある。そのため子ども食堂というと、毎日の食事也十分にとれなかったり家に親がほとんどいなかったりする貧困家庭の子どもたちを支援する「施設」という認識が強いように感じる。しかし実際に子ども食堂に参加してみると、「施設」というより地域規模の小さな「イベント」という認識のほうが近いのではないかと感じた。

そこで、子ども食堂が予示・掲示する新しい社会のあり方・かたちと、子ども食堂が持つ潜在的な可能性について、子ども食堂に参加して感じた現在の役割と課題から考察することを目的とする。

2.ちりゅっ子かふえ magocoro への参加

(1) 活動内容

ちりゅっ子かふえは2019年5月から知立市の西町公民館とヴィラトピア知立の2か所で開催している子ども食堂である。活動内容は昼食の提供と、西町公民館で開催の場合は折り紙教室、レジン作品の手作り体験、そしてビンゴ大会もしくはバルーンアートのプレゼントである。以前まではビンゴ大会を行っていたが、1月18日開催の子ども食堂では様々な場所に行きバルーンアートを作ってくれる団体の方を呼んでおり、子どもたちにとっても人気であった。子どもは中学生まで無料、大人は一人300円で、西町公民館で開催したほうは幼児ぐらいの子どもを連れてきた母親から小・中学生の兄弟、さらに大人のみでの参加もあった。子どもたちが多く、遊べるものも多いため、賑やかな子ども食堂であった。私は受付と折り紙教室、一人でお絵描きやおまごとをする子どもたちに話しかけて一緒に遊ぶ役割をした。折り紙教室は折り紙が得意なボランティアスタッフを中心にほかのスタッフも本を見ながら子どもたちが作りたいといったものを一緒に作った。また、レジン教室は小学生の女の子にとっても人気で、レジン教室を目的に子ども食堂に来ている子どももいた。一方で、ヴィラトピア知立で開催する子ども食堂は、ヴィラマルシェというイベントの際に一部施設を借りて行っている。しかし初めて訪れた際は場所がわからず迷ったほど立地が良いとは言えず、子どもだけで来るのは少し難しいと感じた。実際、車で来る家族連れや大人のみが多く、参加人数も西町公民館に比べて少なかった。

(2) 認識の変化

参加する前は、子ども食堂というと子どもの貧困問題や孤食問題に関する施設なのだろうという認識であった。恵まれない子どもたちに食事を提供する手伝いをするつもりで最初は参加した。しかし、ちりゅっ子かふえに計4回参加して、子どもの貧困問題を支援する施設という認識はほとんどなくなった。食事を提供するという役割も炊き出しのようにただ食事を提供するばかりではなく、友達同士や家族とコミュニケーションをとりながら楽しく食事をする場であることを知ったし、折り紙やレジンなどふだんできない遊びを体験することを目的にしている子どももいることを知った。つまり、子ども食堂は地域の子ども

たちが遊びに行きたいときの選択肢の一つになっているのだ。そこには子ども食堂が支援施設だという認識はなく、公園や公民館、もしくは地域の小さなお祭りと同じレベルのイベントという認識に変わっているのだと感じた。

3.子ども食堂の役割

貧困家庭の子どもたちへの支援施設からイベントへと変わった子ども食堂が果たしている役割について考えていく。まず、支援施設でないといえる理由について、私は次のように考える。1つ目に、食事以外に目的があることである。ちりゅっ子かふえの場合は折り紙教室、レジン教室、ビンゴ大会やバルーンアートがあり、それを目的に子どもたちが集まってくるのが、食事が目的ではないといえる理由である。2つ目に、未就学児が母親と一緒に来ていることである。母親と一緒に来るといことは孤食で困っているわけではないということが分かる。ちりゅっ子かふえで話を聞くと、ママ友の紹介やママ友を作りたいという思いから来たと話す母親もいたことが貧困で悩み来たとはいえない理由である。これらの理由から、子ども食堂は貧困家庭の子どもたちへの支援施設の役割から離れていったと考えた。

ここで、同じように地域の子どものためのイベントの1つである子ども会について考察し、子ども食堂と比較してみる。子ども会は町など小規模な単位で子どもが集まる団体のことで、私も小学校1年生の頃に地域の子ども会に入っていた。ボウリング大会やクリスマス会などのイベントを不定期で開催しており、違う学年の子と仲良くなるきっかけになったり学校以外で普段遊ばない子と遊べる貴重な機会になったりしていた。季節に合わせた行事があったり、ほかの学年のことも遊べたりという点は子ども食堂と似ていると感じる。しかし私の入っていた子ども会はどんどん人も少なくなっていくため私も2年生からは入っていないし、現在はほとんど活動していない。そこには子ども会が抱える問題点があるからだと考える。その問題点とは、活動には親の協力が必要だということである。子ども会を運営する役員を親がやらなければならないことを負担に感じる親は多いのではないかと考えた。特に、片親世帯や共働き世帯である場合、役員ではなくとも子ども会に協力するために時間を作り仕事が増えることはかなり負担になると感じる。また、子ども会のイベントの日がちが決まっていることも家庭の事情があったり予定が制限されてしまったりするため、負担になると考えた。

このような理由から衰退していている子ども会の一方で、子ども食堂はなぜ増加しているのかを考える。それは、子ども食堂は子ども会と違ってボランティアスタッフが運営などすべて行っているため、親は何も準備をする必要がなく、思いついたらすぐに行けるほど気軽に利用できるためである。さらに、子ども食堂を開催している日であったら好きな時に行けるためである。開催している時間であったらどのタイミングで来てもいいし、予定が合う日だけ来ればよい。このような縛られない自由なスタイルが、親にとって都合がよく利用しやすいため子ども食堂の数が増えているのではないかと考えた。また、子どもにとっても、学校以外で集まり友達を作って楽しむ場所としての役割を、子ども会に代わって子ども食堂が果たすようになったと考えた。

よって、子ども食堂の果たす役割とは、学校以外で友達と遊びたい、いろんなイベントは体験をしたいと考えている子どもと、役員などの負担になることはしたくない、先の予定ま

で分からずイベントに行けるかわからないため子ども会のような団体に入ることが不安な親の双方の希望を叶えることができるイベントだといえる。

4.子ども食堂の抱える課題

子ども食堂が子どもにとっても親にとっても気軽に行ける利用しやすい場所であるのに対し、実際に参加する中でいくつか課題も見えてきた。まず運営に関しては、その日にどれだけ来るのかを完全に予測で決めなければならないため、予定より少なかった場合は料金が無駄になってしまったり、予定より多く来てしまった場合は一人分の量を減らしたり食事の提供は終了にしなければならないなど子どもたちに十分に食事を提供することが難しい状況になっている。食事のおかわりが可能な子ども食堂もあるなかで、ちりゅっ子かふえで提供される食事の量はすこし少ないように感じることもある。また、食材などの提供をいただくこともあり、多くの人が子ども食堂のために力になりたいと考えていることがわかった。しかし調理が終わって子ども食堂がスタートしてから持ってくる場合や、保存の効かないものの場合も多く、ボランティアスタッフで分けて帰りに持って帰ったりビンゴの景品として使ったりとうまく利用する方法を子ども食堂側で探さなければならない。食材を提供してくれる人は少しでも役に立ちたいという善意から行動しているため、その善意をもっとうまく活かせるように提供する側と子ども食堂側との連携の方法が課題だと感じた。つぎに、私個人の課題になってしまうが、子どもとの関わり方についても課題がある。ちりゅっ子かふえは室内で開催しているが、子ども達は走り回ったり物を投げて遊んだりしている。特にバルーンアートで剣を作ってもらったときは戦いごっこをして遊ぶ子どもが多かった。他にもまだ幼稚園にも通っていないほどの小さな子どもが、ハサミを使いたくてずっと握りしめているがまだ危ないという状況もあった。走り回るとこけたりぶつかったりして怪我をする可能性もあるし、目を離した好きにハサミで怪我をする可能性もあるためとても危険だと感じる。小学生のみできていてその場に親がいなかったり、親と来ていても他の兄弟の世話をしている常に見ていることは難しかったりするため、ボランティアスタッフで注意して危ないことを伝える必要がある。子育てを経験した主婦のボランティアスタッフの方たちはうまく注意しているが、私はどのように注意すればいいのか、また、どのぐらいの行動から注意すればいいのかわからず、子どもと遊ぶだけではなく注意することも難しく課題だと感じた。

5.新しい社会とは何か

前述した子ども食堂の課題を解決することで、社会の関係性や人々のつながりが新しいものになると考える。

まず、食材などの提供については、提供したい人と子ども食堂を仲介するものが必要だと感じた。例えば、ネットで掲示板のようなものを作りあらかじめ子ども食堂は開催日とメニュー、提供して欲しい食材を書き込んでおく。食材を提供したい人はそれを見て募集している子ども食堂や近くの子どもの食堂と連絡が取れる仕組みを作ることが良いと考える。そうすることで子ども食堂は欲しい食材を手に入れることができるし、せつかく提供してもらったのに使いこなせずにロスになってしまうということを減らすことができる。また、子ども食堂側の心理として食材などを提供したいと言われたら、使いづらいものや足りている

ものであっても断ってしまうと相手の善意を踏みにじっている感覚になるし、子ども食堂は人と人とのつながりで成り立っている部分が大きいためこれからの関係のことを考えると断りづらいというものもあると感じる。そこで先に子ども食堂側が欲しいものを公開していればそれに合わせて提供者側とのつながりが生まれるため、現在のように使いこなせない量の提供をもらうことや食品のロスを減らすことができると考える。愛知県内であれば車で行ける範囲内に子ども食堂がいくつかあることが多く、ほとんどが昼食か夕食の時間帯に開催しているため、野菜など朝とったものであってもすぐに提供先を探せばその日のうちに届けることが可能だと考える。これにより、地域内で協力し合うお隣さん単位の社会から、地域を越えてお互いの需要と供給の関係に基づいたつながりの社会へ変わることができるのではないかと考えた。

そして、子どもとの関わり方については新しい社会ではなく過去の状態に戻ると考える。だれの子どもでも関係なく悪いことをしたら大人が叱っていた時代から、地域の関係性が薄れて他の家族には干渉しないようになり、現在では隣に住んでいる人がどんな人かも知らなかったり、家庭内でも1人で過ごす時間が多かったりと人との関わりが格段に減少している。しかし子ども食堂ではどの子どもにも平等に叱る大人の役割をボランティアスタッフが担っているといえる。片親世帯や共働き世帯など親と過ごす時間が短い子どもも増えている中で、子ども食堂は子どもが親や先生以外の大人と接する数少ない機会であり、大人がみんなで子どもを見守り、育てる社会が戻ってくるのではないかと考えた。

個人が所属する家族や地域といったものの関わり方が多様になった現代社会で、それぞれの所属する枠組みが、裕福であっても貧しくても珍しい家族のかたちをしていても関係なく人と人をつなげることができる役割を担う可能性を子ども食堂は持っているといえる。